



斎藤亥三雄 名誉教授に聞く

工業専門学校のこと

—先生のお生まれは徳島県で（明治三十八年十二月二十五日生まれ）、京都大学工学部のご卒業でしたですね。

斎藤 そうです。

—同志社へいらっしゃる前は、海軍にお勤めだったとうかがっていますが……。

斎藤 海軍といつても、海軍技術研究所でした。

—じゃア、研究員として。

斎藤 そうですね。

—同志社へ来られるのは戦後ですわね。いつごろですか。

斎藤 昭和二十年の十月でした。京都大学の鳥養（利三郎）先生から、同志社の工業専門学校の電気通信科長をやらぬか、椅子があいてるんだが、という知らせをいただいたのです。海軍技術研究所に勤めていた人の中で、就職が決つたのは、私が一番早かったんじゃないかと思えます。

—昭和十九年四月に開校した学校ですね。電気通信科、機械科、化学工業科の三科

が設けられていましたから、その電気通信科ですね。

斎藤 小山熊治郎先生が校長でした。総長は牧野虎次先生だったかな。

—そうですね、そのころなら。工業専門学校の当時のスタッフはよくわからないんですが、斎藤先生のほかにはどんな先生が？

斎藤 覚前（陸夫）さんと柳川（鉄之助）さん、そして私と、この三人が電気、機械、化学の科長でした。柳川さんをご存知ですか。

—いいえ存じ上げません。覚前先生は存じていますけれども。

斎藤 覚前さんと私は京大で、柳川さんは九州大学の卒業でした。

—戦時中の開校時の方は小山校長以外におられなかつたんですか。

斎藤 いませんでした。私たちのあと、瀧山（敬）君とか、南野（幸雄）君とか、それから機械の網島（貞男）君とかが来た。化学の方は、橋本静信君が早かった、柳川さんとたぶん一緒じゃなかつたかと思えます。

—星名泰先生もその頃ですか。

斎藤 いや、星名さんはもう少し後だったと思います。

戦後の同志社と共に

聞き手

河野仁 昭



齋藤亥三雄名誉教授

——そういう先生方が工学部の前史をつくられたんですね。そうすると、昭和十九年四月に工専が出来たといっても、十分なものではなかったわけですね。

齋藤 まアそうでした。最初は工学部をつくる予定だったようです、牧野先生と鳥養先生が話しあって。

——小山校長も京大卒業ですか。

齋藤 そうです。名古屋の中部電力をおやめになつていたので、鳥養先生が牧野先生に頼まれて、同志社で工業専門学校をつくりたいと言っているので行つてくれないかといわれた。それで同志社へ来られたらしいんです。小山先生がすいぶん苦労なさつてつくられたんですよ。

——小山先生はどういうお方ですか。工学

部の初期の先生が「熊さん」といっておられたのをおぼえています。

齋藤 中部電力では相当の地位の方だったんですよ。しかし、同志社では若い先生たちに余り評判がよくなかった。

——どうしてでしょう。

齋藤 頑固な方だったから。(笑)

——頑固ですか。

齋藤 そうでした。とつても頑固でしたよ。だから小山先生のやり方を皆が余りよく言わなかった。まア、お互いに頑固だったけどね。

(笑)

——小山先生は教授スタッフを集めるのにご苦労なされたでしょうね。

齋藤 大変だったと思います。ただ、京大の鳥養さんとか西原さんとか堀場さんがバツクについて下さったから。

——齋藤先生が来られた頃の工専は、出来かかったところだし、終戦直後のことだし、設備などはととのつていなかったんですよ。

齋藤 いま商学部の建物(至誠館)があるところに、以前は学生会館があつたでしょう。

——ありました、木造二階建ての。

齋藤 あの学生会館を全部使つて、その二階を先生方の研究室にしたり、いろんなことをやって。

——ハリス理化学館ではなかったんですよ。

齋藤 理化学館も使いましたが、あれは準備だった。ほとんどの先生たちは学生会館の二階におられたですよ。私もそうだった。

——学生会館は小さい建物でしたから、教室は足りませんか。

齋藤 今はありませんが、その頃はバラツクがありましたね。

——いま明德館が建っているあたりでしたね。たしか二棟。

齋藤 学生会館の前とちがつたかな。

——学生会館の前には何もなかったように思いますか。

齋藤 そうだったかなア。細長いバラツク。あれを教室にして授業を始めたんです。

——実験用の設備はございましたか。

齋藤 ないのでね、私がいぶん持つてきた。

——先生個人のものを?

齋藤 戦争が終つちやつたから海軍技術研



小山熊治郎校長

工專の第一回卒業生です。

——第一回卒業というと、昭和十九年入学で三年制だったから昭和二十二年ですか。

齋藤 名簿を見ればわかりますよ、二十二年ですなア。(電気通信科四十四名、機械工学科四十名、化学工業科四十三名)

——やっぱり。

齋藤 このときの卒業生は個性があつて、なかなか面白かつた。

——そうですね。兵隊に行くよりもというので、きっと優秀な人が集まつたんですね。

齋藤 第一回の卒業生というのは、みんないいですねア。

——なにもないときに学ばれた方たちですのにねえ。

新制大学工学部の発足

——昭和二十三年に新しい教育法によって同志社大学が生まれるでしょう。その年は神

学部、文学部、法学部、経済学部の四学部が設けられて、他に教養課程の学生が二年間籍を置く教養学部というのがございましたよ。生物学の山田忠男先生などは教養学部

に所属されたんでしょうね。

齋藤 私は教養学部についてはよく知らないのです。生物の天野(宏)君がいるでしょう、あの人に聞けばわかるんですが。

——天野先生は四、五年前に定年で退職なさいました。

齋藤 そうでしたね。

——商学部と工学部は他の四学部より一年遅れて、昭和二十四年に学部になりますね。

齋藤 商学部と一緒に学部昇格したことはおぼえています。岩倉に高等商業学校(当時の校名は経済専門学校)というのがあつて、それが商学部になつたんです。あのころの商学部の先生方はもういないでしょうなア。

——おられませんが(笑)。高商のいちばん若い先生だったという平山玄先生に二年ほど前でしたが、このインタビューで寄せていただきました。工学部が一年おくれて学部になつたというのは、設備が十分でなかったからでしょうか。

齋藤 やはり設備の問題でしょう。

——工専が基礎になつて工学部になつたのは確かですね。

齋藤 商学部が高商から発展したように、

究所も解散になつて、私が使っていた設備なども要らなくなつたものだから、京都大学の林重憲さんのところへ預けてあつたのです。それをそのまま同志社へ持つて来ましてね。林さんも阿部清さんと一緒に、あとで教授として同志社へ来てくれました。

——初めて耳にするお話です。そんなふうにしてスタッフや設備をととのえていかれたんですねえ。

工業専門学校第一回卒業生

——その頃の学生数はわずかだったんでしようね。

齋藤 多くはなかつたけれども、優秀な学生がいました。いまだにつきあつているのは

工学部も工専が基礎になったと思います。しかし、工学部になった当時のことはよく憶えていませんな。私は昭和二十五年に短期大工学部が開設されたので、その方へ行ったのです。

——工学部が出来たばかりで教授が必要だったでしょうに。

斎藤 短期大学が開設されても、余り行き手がない。それで私が専任で行くことになったのです。

——開設当初の短大には、英語学科、商経学科、工業学科（電気学専攻）がございましたから、それですね（昭和三十二年廃部）。
斎藤 私は自分の経歴とか学校の重要と思われる出来事については、このノートに要点を書いているんだが、工学部が出来たころのことについては、余り書いておりません。

——最初の工学部長はどなたですか。

斎藤 小山先生ですよ。

——工専の校長から横すべりというかたちで……。

斎藤 横すべりともいえないことはないけれども、選挙したのです。そうしたら堀場信吉）先生に票が集まった。ところが堀場先生

が辞退されたんですね。

——それで小山先生に。

斎藤 票は小山先生がちよつと少なくて次点だった。

——頑固だったから若い先生方に敬遠されたんでしょか（笑）。工専をつくられた小山先生がいらっしやるんだからというお気持ち、堀場先生にはあつたかもしれないね。



旧学生会館（この二階に研究室があった）

小山先生にしてみれば、工専以来の責任もあることだからと……。

ハリス理化学校六十周年記念祭

斎藤 私のノートのメモによると、昭和二十五年十月十八日に「ハリス記念祭六十周年」と書いています。

——ハリス理化学校六十周年記念祭のことですね。創刊当初の『同志社工学会誌』にその特集号があつたのを見た覚えがあります。ハリス理化学校が開設されたのが新島襄の永眠の年一八九〇（明治二十三）年九月ですから、一九五〇（昭和二十五）年は六十周年になるんです。十月十八日に記念祭をおこなつたというのは、明治二十九年十月十八日に寄付者のハリスが永眠していますから、その日選ばれたのだらうと思いますね。

斎藤 その六十周年記念祭のときに、だれか来られたような気がするんですがね。

——J・N・ハリスさんの方からでしたら、確かお子さんはいなかったはずですので、お子さんとかお孫さんじゃないですね。

斎藤 そうですか、だれが来たか書いてな

いものだからわからない。

——ハリス理化学校を卒業された加藤与五郎先生ではないでしょうか。

齋藤 憶えていませんア。加藤先生は亡くなられましたねえ。

——昭和四十二年ですね。加藤先生は工専が出来るとき、お名前だけかどうか教授になられますね。

齋藤 そうでしたか、余り同志社へは来ておられなかったように思うし、よく憶えていません。ただ、創造科学研究所というのを軽井沢のお家の方につくられて（昭和三十五年創立）、その方へは卜部（泰正）君など毎年行っていたし、夏休みには同志社の学生たちも行っていました。

——ハリス理化学校の卒業生ですから、工学部にとっても深い関係がございますね。

同工館の建設

齋藤 それから私のノートには、昭和二十五年十月に同工館が出来たと書かれている。

——ハリス理化学校六十周年記念式と同じ月ですね、工学部が発足して二年目。同工館

は工学部がもった最初の専用校舎といつていいように思うのですが、あの建物は卒業生と、工学部の学生の父母がかなり多額の寄付をして下さって出来たとか……。

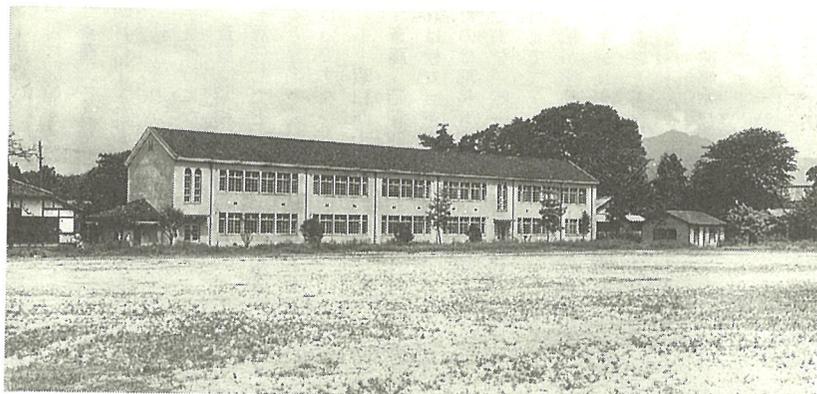
齋藤 そうですね。父兄がずいぶん世話して下さいましたですよ、私も憶えています。小山先生と一緒に、父兄の家を寄付のお願いに回ったこともありました。

——そうですね。総工費四〇〇万円と記録にございますけれども、当時のことですから、大変だっただろうと想像されます。（昭和三十七年に解体。翌三十八年七月その跡に博遠館の西半分が完成、三十九年八月東半分が完成）

工学部の充実

——工学部に大学院工学研究科が設けられるのは、昭和三十年ですね。他の研究科より少し遅れるのは、やはり設備の問題だったんだらうと想像されますが、先生方のほうは相当充実してきていたようですね。

齋藤 学位をもっておられる方で大学院の教授になられた方が、当時かなり多くいました。



同工館

——現在は学部でも、工学部では教授に任用される方はたいい博士ですね。

齋藤 いまはそうなっていますか。大学院の場合は学位をもっているが無条件に教授になれたように記憶しています。だから大学院をつくるときには、みんな一生懸命になって学位をとったですよ。その中で業にとつたのは滝山(敬)君。ほかの人はだいたいみな苦労しているんじゃないですか。それでもまあ、工学部に関係のある学問は、ご承知のように新しい学問分野がたくさんありますから、他の学部の学問にくらべると学位をとりやすいということはいえますなア。

——人文科学、社会科学などにくらべて。

齋藤 そうですね。

——それにしても工学部は他の学部とちがって、同志社では歴史が浅うございますね、起源をハリス理化学校にもとめるにしても、明治三十年代から昭和十九年の工専誕生まで長い空白期間があることですし。私は同志社大学工学部の充実発展は素晴らしいものだったと思うのです。齋藤先生はその工学部の生みの親のお一人に数えられると思いますが、何度か工学部長もおつとめになりますか。

同志社での役職歴

齋藤 工学部長もやりましたが、私のノートを見ますとね、昭和二十九年学生部長、三十二年までですな。昭和三十三年四月に商業高等学校校長、翌年三月まで。三十四年四月に工学部長になって三十六年三月まで、これが一回目ですなア。そして三十八年の八月に先ほどいった同工館のあとに博遠館が出来て。

——第一期工事でしょう。理工学研究所長もなさっておられますね(昭和三十七年)。

齋藤 昭和三十八年九月に体育会長になって、昭和三十九年九月に再び学生部長、四十二年四月に辞めて、就職委員長をその年の五月から一年つとめました。

——この時期に先生が学生部長をなさっておられたとき、私は学生会館(学生会館)の本館を建てるからというので、学生部へ移ったんです。ですから学生部長であった齋藤先生をよく存じ上げています。

齋藤 そうでしたか。

——はい、学生会館本館は昭和四十年の十一月に開館するんです。同志社EVEのとき。齋藤 そうでした。それから昭和四十三年四月に工学部長、これが二度目です。

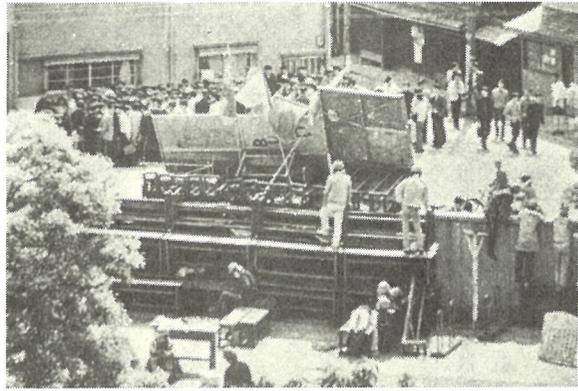
——それからですねえ、大学紛争の最中に学長代行になられたり。

齋藤 昭和四十三年四月に星名さんが学長を辞任したと、私はノートに書いてある。すると星名さんはその前に学長になっていたらしいですな。

——昭和四十一年一月でした。

齋藤 昭和四十三年四月に同志社理事、これは校友会選出と書いてある。その前にやったのは部長互選で、今度は校友会から出たんですな。四十三年六月学長代行(四十四年三月まで)。

私が学長代行のとき、同志社のポート部がメキシコオリンピックに出場したんですよ。そのこともノートに書いてあります。出場したんだけどあまりいい成績ではなかった。彼等が帰ってきたとき、私は迎えに行つたんですよ、負けたけれどもうちの学生たちのことだし。そしたらみなシュンとしているんだ(笑)。あまりにも元気がない。だから励



大学紛争のころ（新町正門）

ましてやったことを憶えています。
——学長代行になられたのは、星名学長の後任選挙ができなかったということがあつて。

齋藤 そうです。学長選挙をやるうとする
と、学生たちがやってきて妨害するんだ。学
長を選べないものだから代行ですな。その頃

は学部長の中で一番年長の方が代行になるこ
とになっていて、最初は文学部長の遠藤（汪
吉）さんで、次が私だった。私はそんなに年
取っていたのかなア。（笑）

それから昭和四十六年に外国へ行った。四
十七年に秦（孝治郎）理事長が急に亡くなら
れて、私に理事長代行になれということだ。

——秦理事長が亡くなられたのは、昭和四
十七年十一月二十五日ですね、あつけない最
後で、私、電話をもらつてとんでいったんで
すが、遺体のそばに座つても、亡くなられた
ことが信じられませんでした。齋藤先生はま
もなく正式に理事長になられますね。

齋藤 昭和四十九年四月です。それから百
周年の記念事業をやるので募金をやることに
なつて、小松（幸雄）先生を事務局長にお願
いしたんですよ。四十九年十二月二日にハー
デーさんの五代目の子孫が同志社へ来られ
たと、私は書いてる。フラットさんと書いて
ありますなア。

——そうですね。五代目のお孫さんですか。
ハーデーが永眠したのは明治二十年八月で
すから、その人の五代目の孫というのはちょ
つと妙ですね。

齋藤 そういわれてみるとそうですねア。
私はそう書いてあるんだが、間違つてメモシ
たかな。

——百周年の記念式典は宝ヶ池の京都国際
会館でおこなわれましたが、先生が理事長の
ときですわね。

齋藤 五十年の十一月二十九日、百周年の
記念式典を国際会議場でおこなうとしか書い
てないんだが、あの会場は亡くなられた松下
幸之助さんが関係しておられたので、私が松
下さんに頼んで使わせていただいたんです。

——そうでしたか。百周年らしくて大変印
象ぶかく思いました。

齋藤 理事長を辞めたのが昭和五十三年十
一月。

——五年間ですね。大学紛争の後ではある
し、百周年の記念事業募金はあるし、ご苦勞
が多かつたことと思います。

齋藤 苦勞といつてもね……。まア余りお
もしろいことはなかつたですなア。（笑）

——教授の方は昭和五十一年三月で定年ご
退職のようですから、理事長をなさるのはは定
年以後ですね。

齋藤 そうですね。

大学紛争のころ

——先ほどのお話しにかえらせていただきたいのですが、紛争中、私自身が学生部の仕事をさせていただったので余計にそう思うのかもしれないんですが、先生が二度目に学生部長や工学部長、そして学長代行をなさっておられたころは、本当に大変でしたですねえ。私など思い出しでもぞつとします。

齋藤 最初に出て来たのが、寮の光熱水費は学校が負担すべきだという要求で、これは団交をやった、そしていちおう解決したと私は書いています。それから此春寮、これは神学部の人だつたですね、その寮生が座り込みをしたと書いています。昭和四十年五月十六日。

——思い出しました。紛争の発端は寮問題だったですね。

齋藤 それから大学記念会館（大学会館）の管理運営に関して学友会がストを決行して、本部（有終館）が占拠された。これは四十年の十二月ですなア。

——三十九年の十二月かもしれないです

ね、四十年の十二月には会館はもう使われていましたから。私、その主任だったんです。

齋藤 そうですか。それから十一月十六日から十九日にかけて、会館の管理運営について団交をした。学校側からは学長、会館運営委員会。これが学友会と団交した。どんな結末になったかは私のノートには書いていないし、憶えていませんが。

——十一月十九日でしたら、多分そのとき、EVEの期間暫定的に開館しよう、管理運営のこまかいことや技術的な問題は、それ以後に大学側と学生側のそれぞれの代表が話し合つて決める、ということになったはずですよ。

齋藤 私、そういうことまではノートに書いておかなかつたものだから。とにかく学長代行のときはひどいめに会つたよ、憶えていますよ。たびたび団交にひつぱり出されてねえ。それでもまあ、よく切り抜けたものだなア、学生部に優秀なスタッフがいてくれたおかげです、私などが学生部長や学長代行をやつていけたのは。

——先生は学生たちの言うことを、親切に聞いてあげたですね。ほんとにいろんなことがあつて……。

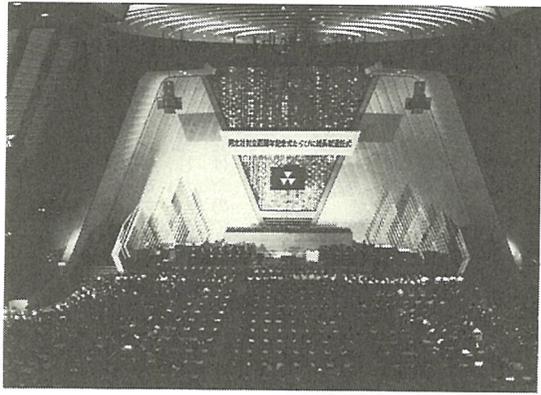
齋藤 あるとき京大の奥田（東）総長から私に電話があつて、「齋藤君、君とこの学生がうちの大学へ暴れ込んで来て始末が悪い、ちよつと来てくれ」言うんだ。仕方がないからこのこに出掛けて行つたら、それらしい者はいないのです。だから「先生、同志社の学生はおりませんよ」と言つたら、「さつきまでいんだ、どこかへ行つちやつたかな」。奥田先生はそんなことを言つたですよ（笑）。

——そういうときは学生部の職員が行つたものですが。

齋藤 私は奥田先生をよく知っているんですよ、それで私に電話かけてきた。あのころは同志社や京大だけでなしに、全国的に学生運動がおこつていて、しかも学生間にいろんなセクトがあつて大変複雑でね。同志社と立命館ではセクトが違つたわけ。

——はい、そうでした。

齋藤 それでいちばん困つたのは、昭和四十四年二月十三日の立命館大学の入学試験に同志社の教室を貸す約束をしていたのを、同志社で立命館の入試をやつたら、学友会が入試を妨害しにきて大変なことになる、きつと乱闘がおきる、これは火を見るより明らかだ



創立百周年記念式典（国立京都国際会館）1975年11月29日

という見通しが学内にあるものだから、立命館にお断わりしたわけです。

——同志社のセクトと同じ立命館の学生運動の連中は、立命からしめだされて同志社の連中と一緒に行動しているということ、私は聞きました。そういうことがあったからでしょう。

齋藤 いろんな事態が予想されるのは確か

だった。それで立命館の末川（博）総長がわざわざ同志社へ来られて、教室を使わせて下さいと頼まれたんですよ。私と部長の主だった人が、末川先生にお会いして、学生運動のセクトの問題とかいろいろご説明して、お断わりしたんだが、私はあのことがいちばん残念だし、本当に申し訳なくてね、学長代行時代のことでいまだに心に残っているのはそのことですよ。あれは私の失敗といえれば失敗でした。

——学友会というか同志社の学生運動の連中は、同志社が立命館に教室を貸したとなると、意地になって何かやったでしょうね。あの時分のことを思いますと、黙っていたとは考えにくい気がしますが。

齋藤 それがわかっていたから末川総長にそのことを申し上げてお断わりしたわけです。しかし、同志社はお貸ししますと約束をしていたんだから。それまでだつて、入試のときはお互いに貸したり借りたりしてきていた。それを断わつたんだから。入学試験というのは学校にとってとても大事なことでですよ。立命館としては同志社を借りてその入試をやる準備をしていたんだ。本当に悪いこと

をしたと思つてねえ。

——方が一、同志社での入試が妨害されて潰されたらと、心配される方々がいても、不思議ではない状態でしたけれども。

齋藤 そうだけれども、私たちが体を張つても入試が無事に来るようにして、それで潰されたら、これは仕方がない、お詫びの仕方もあるし、わかつてももらえる。そういうこともやらないで、こちらが約束を破つたんだから。とにかく、お貸ししますと約束したかぎり、その約束は精一杯努めて守るべきでした。

あれだけが私の心残りです。悪いことしたなと思つています。ほかには格別心に残ることではないですが。団交でいろいろやられたといつても、相手はうちの学生のことだから、こちらが我慢すれば済むことなんで……。まあ、あのころというのは、何もかも異常だった。異常でしたよ。

——全くそうでした。過ぎ去つてから考え

キリスト教と新島襄

——話題を変えて申し訳ありませんが、斎藤先生は同志社へ来られてからキリスト信仰をもつようになられたんですか。

斎藤 そうじゃありません、大学時代です。

——京都大学ですね。導いて下さる先生がおられて？

斎藤 東北大学の教授であり、私とは同郷人であった佐藤という先生がおられて、佐藤先生が宗教の問題を説きながら全国をまわられたことがあるんです。私はそのお話しを聞いて非常に共鳴したのだから、先生から保津川で洗礼を受けたのです。

——保津川で？

斎藤 そうです。しかし、実際にキリスト教というものがわかるようになったのは、佐藤先生の教えによつてではないですね、卒業して東京へ行ってからです。

——教会とか日曜学校とかで。

斎藤 教会というより集会でした、個人的な。いまだにその方を私は尊敬していますが、立派な方でした。そこで聖書の勉強をさせて

いただきました。週に一回。雨が降つても風が吹いても休まなかつた。その間、私は千葉の連隊へ少尉で召集を受けて、十カ月か一年の連隊にいたんだけど、そこから毎週一回は聖書の勉強に通いました。

——軍隊にいて聖書の勉強に通うのは、具合がわるくはなかつたですか。

斎藤 そんなことはなかつたですよ。クリスチャンであることをとやかく言われることはなかつた。海軍の研究所に勤務するようになってのちに、問題にされることはありませんが。

——昭和十二年に日中戦争が始まつてからではないかと思われませんか。

斎藤 そうかな、そうかもしれませんね。私はいまでも小さい集会をもっていますよ。

——聖書の勉強の？

斎藤 月に五、六回は集会があつて、ほんの僅かだけれども、そこで話をします。だから聖書はわりあいよく読めます。

——このお部屋も集会ができそうですね、オルガンがあるし、壁ざわと窓ざわには、ざらつと長椅子などが並べてあつて。二十人くらい座れるのはありませんか。細長くて、

応接間というより集会室といった感じがします。たくさんシンビジュールの鉢があつて。

斎藤 花は家内の趣味なんだ。この部屋でも月に二、三回やりますよ。ここに座れるくらいな人数だから、多くはありません。

——ああ、やっぱり。

斎藤 息子が造つてくれた部屋なんで、ここで月に二、三回やつて、それ以外に三回くらいよその家へ私が出掛けて行くのです。人に話をするとなると、短い話でも勉強しなくちゃいけないので困つてしまふ。

——以前からそのようにやつていらつしやるんですか。

斎藤 私たちは「集会」といっていますね、終戦直後に私たちが京都へ来たとき、もうすでに集会がありましたから、ずいぶんになりますよ。それ以来ずっと続いています。

——終戦直後といえば先生が同志社へ来られたときですね。新島襄についてもいろいろ本などお読みになられたでしょうが、新島についてどのようにお考えでしょうか。一九九〇年一月二十三日は永眠百周年です。

斎藤 私は同志社に勤めていたとき、それほどは思つていなかったんですよ、新島先

生は偉い人だということがわかってきたのは、退職してからですね。

——そうですか。何か本を読まれるとか、経験をなさるとか。

斎藤 だれが書いた本だったかいま思い出せませんが、その本の中に、新島先生は困ったときには「立ちどまった」と書いてあった。その「立ちどまった」というところが私にはとつても印象が良かった。感激しました。

——「立ちどまった」。だれの本でしょうか、私は気がつきませんでした。

斎藤 新島先生は心配事などたくさんもつていただろうと思うんですよ、その新島先生が、困ったことがあると「立ちどまった」とね、確かそう書いてありますよ。

——私なども学生生徒に新島先生について話をすることがありますけれど、中学・高校生は全員出席の礼拝の時間ですからよくわかりませんが、大学生のばあい、新島の話とか本というのは余り興味がないみたいで、どうしたものかと考えさせられます。

斎藤 だれでもそうじゃないですか。現職の同志社の先生方だって、だいたいにおいてあまり関心を示されなんでしょう。私も正直

のところあまり関心がなかった。いまいつたように、同志社をやめてから新島先生について書いた本をときどき読ませてもらうようになったので。現役のときは、近すぎてかえってわからないということもありますよ。

——学生生徒たちも？

斎藤 そうだと思いますがねえ。これは個人の考えですが、偉い人は、尊敬する人必ず一人は持っていますね。

——人生の目標になるような人でしょうか。

斎藤 そうですね。

——偉い人には、人の偉さがわかるわけですね。だから人を尊敬できるし、人からも尊敬される。

斎藤 そうでしょう。

——新島先生がそうですね、たとえばハーディーさん夫妻に対して。そして先生は卒業生たちからすごく尊敬されて……。新島先生についてよく調べて、新島先生を尊敬するようになる、そういう学生生徒が一人でも多く出てくれるように期待しています。

今日は長時間、いろんなお話を聞かせて下さいまして、ありがとうございました。これ

からもどうぞお元気で。

(一九八九年十二月二十二日、斎藤名教授住宅で収録)

表紙のことば

正門の前に立つ。正面には良心碑、右に致遠館、左に有終館が建っている。もつとも同志社の雰囲気は漂よわせているところだろう。私は何時もは鳥丸通りの西門を通るので、ときたまに正門から入ると、ああ同志社だなあ、と新鮮な気持ちになる。そして学生が良心碑の拓本をとっているのを見ると、よう、やっていると、思わず声をかけたくなる。

この門は梅の咲く頃卒業生を送り、桜の頃には新入生を迎える。しかし燃えるよう新緑こそ、この門にふさわしい。

玉井敬之

(文学文学部教授)